

東亜同文書院大学から愛知大学への“過渡期”の書簡

— 吳羽分校長が、帰国直前の学長へ発したメッセージ —

佃 隆一郎

ここに掲げる三点の書簡（仮に年代順にA・B・Cとする）は、東亜同文書院大学吳羽分校（一九四五（昭和二〇）年の敗戦前後の時期富山県に設立された、同大学生の本土滞留・復員者のための校舎）の校長であった齋伯守（のち愛知大学教授。当時の人物については敬称略）より、中国上海の同大学学長であった本間喜二（のち愛知大学学長）の東京の留守宅宛てに送られた、母体としての東亜同文会を含めた同大学の、今後のあり方についての各種論議・経過を報告しているものである。

これら書簡が出された時期は日本の敗戦から、本間らが上海より帰国した（一九四六年三月一日）直前までにあたり、その間本土では吳羽分校の閉鎖、東亜同文会本部「霞山会館」の接収（いずれも四五年十二月）、同文会の解散決議（四六年一月三十一日）といった関連重大事が相次いでいて、吳羽分校長としての齋伯の、東亜同文会および東亜同文書院大学を清算する際の葛藤や、“継承学校”を設立するための苦闘、さらには本間の帰国を待ちわびている

心情が、（同封の印刷文書を含めた）各文面からうかがえよう（むろん、本間らも上海で東亜同文書院大学の廃校と教職員・学生の引揚げに対して、並々ならぬ苦勞をしていたとのことであり、また、これら書簡が上海宛てでないのは、敗戦後の混乱の中、連絡が全くとれなかったことによることは言うまでもない）。

本間らが帰国を果たしたのち、“継承学校”は幾多の曲折と関係者の努力の末、愛知県豊橋市に愛知大学として一九四六（昭和二一）年十一月に実現するのであるが、これら書簡には候補地として豊橋市の名はまだなく、この時点では大分県別府市に“内定”していたことに注目されたい。また、ここでは新大学の仮称が「東亜大学」となっていることにも予めふれておいた上で、東亜同文書院大から愛知大への“過渡期の記録”として、各人の参考に処したい。

なお、とりわけ書簡Bにおいて、一部の関係者に対していささか感情的・批判的にとれる記述が見られるが、当時の緊迫した情勢を映し出しているものとして捉えるべきと

考え、あえてほぼそのままとした。「」理解されたい。また、表記については極力原文（手書き）のままとする方針のもと、ここに活字化した。史料文中の補足・注記は「」で挿入した（したがって、文中の通常カッコはすべて原文にあるものである）。

書簡A 齋伯守より本間登龜（喜一夫人）宛て

一九四五年十二月十八日付

〔封筒表〕

澁谷区代々木本町七八六

本間登龜様

〔封筒裏〕

神田区西神田二ノ七 日華学会内

東亜同文書院大学事務所 齋伯守

〔以下四行、上海海格路の東亜同文書院大学所在地印

刷を抹消〕

20年12月18日

〔本文〕

本間先生御令夫人様 傳史

拝啓 御無沙汰致し居り申訳無之候 本日上海より引揚げたる学生の連絡あり、不取敢打電御無事を御報告申上置き候も 詳細を重ねて申添致候

学内を引揚げられ一応自然科学研究所（佛租界）に入ら

れ候も重慶軍の為に虹口（ホンキュー）の横濱橋にある青年會館に復員学生三百名と共に移られ目下食糧等の御不自由もなく御健在の由につき 御安心被下度候 去る八日の第一船で引揚げられる予定なりしところ五千名の乗船予定を二千三百名に減員せし為め 第二次が第三次の船に後廻しとなりし為め書院関係者は地域外に居住せし前記学生五名が急遽乗船し得たるのみに御座候 上海と鹿児島との往復日数二週間と見て第二船ハ本年末には必ず到着する筈、若し第三船としても新春には御帰国相成見込に御座候間 至急御手配の上、御帰宅御準備の程御必要かと存上候、治安、食糧共に非常に良好なる由に候間 我々の御憂慮申上げ候ても 單に杞憂に終りたる次第、全く以て安堵仕り候

千圓のみ持出しを許可されとの事に御座候
持帰持帰りゆるされたるものは三十斤以内との由、金は

小生九月末以来、富山縣吳羽に在りて分校を設け内地学生三百名を収容致し候も 食糧事情の為め先月末にて打切り一応休暇状態に入れ候 小生ハ校舎貸與を海軍省より受ける為め佐世保・博多に出張、十一月末、吳羽に帰着、十二月上京、毎日同文會に出頭、一度御伺ひ申上度存じ居り乍ら寸暇もなく失礼致申候、然るところ最近に至りて外務省よりの示唆によれば同文會ハマッカーサー司令部より解散を命ぜられる懸念ある為め自發的解消の方針に決定、従つて書院も廢校となる重大局面に到着、学生の轉学処置の為め更に繁忙を來し居り病軀の小生としてハ無理がきかず困却致し居り候も 本間先生御帰国まではおれてはならぬものと頑張り居り候、半年しなければお

帰りならぬとのみ思ひ込み居り候処、つい近々御帰りと分明致したので、張りつめた気もゆるみ臥床する始末に御座候何にしても誠によろこばしく、九月以来の苦痛も急に解けたるとき心地致し候、何れ拜眉を期し度存候も、右不取敢御報知まで御免被下度候

◎同文會ハ進駐軍に借り上げられ神田区神田二ノ七日華学会内に移轉仕り候

十二月十七日深更

齋伯守拝

別紙〔A・B〕

御手元に御保存、先生に早々お目にかけ被下度候

拜啓書院を内地に存続せしむべく微力ながら努力し来り候處昨日外務省より理事長の出頭を要請し来り、同文會並に書院の存廃に關して重大なる示唆を與へられ候

仍て理事長より学校側の態度表明を要求され候に就ては熟慮の結果緊急の處置として別紙〔B〕の如き答申を致し候、最近理事諸公は辞表提出中のため、同文會並に書院の新方針を新理事會によりて決定せしむべく希望され居り候も、近衛〔文麿〕公身邊の急変、進駐軍の會館借上げの爲め遷延を許されざる事態にも達着し居り、近々近衛公と理事長との會見によりて明確なる態勢の確立を見るに至るものと存ぜられ候、従つて正式の重大発表は稍々遷延すること、思はれ候も不取敢學生生徒に對する措置として轉学を勧奨する書類を急送すること、致し候

尚本日外務省、文部省にも出頭の上、直接事情を聴取仕り、右の措置以外に方法無きことを確認仕り候

かゝる重大事發生致候に就ては、呉羽に御集合を願ひ種々御協議申上度存候も、何分交通其他諸事情を慮り乍遺憾取止め可申候間、御意見の程折返し御通知被下度慇懃致候

草々

昭和二十年十二月十日

東亜同文書院大学内地分校々々長代理

齋伯守

殿

追而不着未拂俸給付至急假拂致度毎月金額並に月數御報告被下度な

ほ退職手當の未出は後日に遷延すること、相成可為念中添候

本狀に對する御返事は、東京都神田區西神田四ノ八、舊日華学会内

東亜同文會東亜同文書院大学事務所宛に願上候

〔別紙B〕

昭和二十年十二月九日

東亜同文書院大学教授 齋伯守

東亜同文會理事長 津田靜枝 殿

答申書

今般御諮問相受候東亜同文書院大学存廢ノ問題ニ関シテハ、新事態ノ發生ニ伴ヒ緊急ノ處置トシテ廢校ノ已ムナキニ至リタルモノト思考致候、但シ左記希望條項ヲ御參酌被下ソノ具現ニ御盡力相願申上度茲ニ及答申候也

希望条項

一、學生生徒及卒業生ニ對スル措置

一、轉学ニ関シテ

学部生ハ東京産業大學、神戸經濟大學、各地帝國大學經濟學

部、或ハ法学部ニ、豫科生ハ東京産業大学豫科、神戸経済大
学豫科、或ハ各地高等学校文科ニ、専門部及北京経済専門学
校生徒ハ各地経済専門学校、外事専門学校ニ轉学シ得ルヤウ
官省ノ斡旋ヲ願ヒ度シ

ロ、派遣生、外地ニ父兄ヲ有ツ学生生徒、罹災学生生徒ニ関シテ育
英基金ノ設定乃至育英団体ヨリ学資金ヲ受クル斡旋方依頼致
度シ

ハ、卒業生ニ関シテ

連絡機関ノ設定ヲ考慮サレタシ(現地引揚教職員ノ連絡モ亦
此ノ機関ニヨルモノトス)

二、教職員ニ對スル措置

イ、退職手當

ロ、解散手當

ハ、現地ヨリノ引揚旅費及支度料

右ノ資金ヲ別途ニ(経常費以外ニ)設定相願ヒタシ

三、残務ニ對スル措置

同文會ハ残務整理委員會ヲ結成サレ度シ(同文書院大学モ亦ソノ
残務整理委員會ヲ結成スルモノトス)

四、研究所ノ新設

同文會關係(書院、省別全誌刊行會等)ノ人ト物トヲ合流シテ研
究所ノ新設ヲ実現サレ度シ、ソノ要旨左ノ如シ

イ、目的 支那研究ニ支那知識ノ内地ヘノ普及

ロ、財源 補助餘剰金及寄附金

ハ、資料 同文會所屬圖書及霞山文庫、陽明文庫、省別全誌

編纂資料

ニ、研究員 大学及省別全誌現旧教職員

ホ、事務員 同文會職員

へ、所長 大学学長
ト、設立委員会ノ速急設定
五、聲明書ノ發表
同文會ト大学ト連名トス

書簡B 齋伯守より本間喜一(留守宅)宛て

一九四六年一月三十一日付(消印は四日後)

〔封筒裏〕

澁谷区代々木本町七八六

本間喜一先生

〔封筒裏〕

神田区西神田二ノ七ノ日華学会内

東京都麹町區霞ヶ關三丁目四番地ノ三

東亜同文會業務部

電話〔略〕

振替口座〔略〕

東亜同文書院大学事務所

〔本文〕

本間先生台鑒

昭和二十一年一月三十一日 齋伯守

一日千秋の思ひにて御帰還を鶴首致し居り候処腎臓、神経
痛を併発致し難儀致候間一兩日中に一応歸郷の上養生可仕
拝眉を得ずして離京するの已むなきを残念に思ひ候
津田〔静枝〕理事長退任以来 同文會との接渉はらちの

あかぬものに有之、一宮〔房治郎〕理事長〔代理〕とは激論をしたる問柄につき特に無責任を感じ居り候、宇治田〔直義〕氏ハ同窓会云々と称して図書並に剰余金の横奪を策し居り最近は他の団体への合流を策し居り候条外務省〔久保田事務官〕に対して先手を打ち置き候条心配なかるまじく候外務省案としてハ純正なる研究所の設立を懇願致し居り候条其他ハ認可せざる見込みに御座候 研究所案ハ牧田〔武〕氏の手元まで提出致置候〔人件費二十五万円、經常費二十五万円、開設費十五万円〕萬事太田〔英二〕氏に御聴取被下度候 轉字処置ハ太田氏に會計庶務一般ハ石川〔正二〕、浅野〔巧美〕、広江〔貞助〕三氏に一任致置候条御聴取被下度 未着送金の処置は特に肝要に存せられ候〔坂本〔一郎〕氏、下関・福岡兩替為貯金局調査中〕清算の嚴重監視は外務省〔久保田事務官〕に申込置き候も充分御留意被下度願上候

学校新設問題に關しては本年に入りて文部省の意向変化しつ、あり届出制度とする方針に向ひつ、あるらしく同文會へもその意向を通じ置き候も、若し設立の意志なき場合は我々にて設立する計畫に有之但し、外務省の注文としてハ書院の殘黨といふ痕跡を残さぬ様にせよとの事に有之候、候補地としてハ坂本長峰〔永峰崇仁〕兩氏の進言により別府に定め、別府市の奔走幹旋の形式に仕組申候、問題は資金の獲得に有之、早急に「東亜大学設立假事務所」を先生お宅に御指定被下 それを根城として寄附金の募集にかゝる必要有之候但し学生の轉字は新設学校の成否如何に不拘 継続断行の方針となし被下度 学生をして去就に迷はすことなき様念願仕り候

大学の予算を編成致候も従来の教職員を全部抱擁するには余りにも膨大となり成立不可能に御座候、採用教職員は嚴選さるべき必要あり、準備委員等に加入する人物に御考慮を加へられ度候

特に御託び申上ぐべきことは出征應召家族への送金事務は〔氏名略〕東京駐在書記に委託致置き候も同氏の怠慢により一名に送りたるのみにて他は未処置と相來居り、仍て昨年未附を以て退職を命じ申候、

神谷〔龍男〕氏は此度の功勞により教授にせよと申候につぎ大内〔暢三〕先生御依頼のこともあり且つ先生との約束云々を申立つるにより助教授に復活増俸せしめ申候も常に策動的にして終始悩まされ通しに有之、是れ全く小生の責任につき平に御託び申上度有之小生ハ尤早健康上の廢人に有之一段落つき候節ハ御放免被下度御願申上候先ハ石要のみ御免被下度候

敬具

文部省ハ相良事務官と主として交渉、
田中〔耕太郎〕局長にも面談、阿部〔安倍能成〕新大臣以來空氣一轉、大学建設には絶好の機會、なるべく同文會とのくざれ縁は切りたきものなるも所属の図書が煩しきものに候

学校の性格は政治に触れるはよろしからずとのことに有之、産業大学的なものとして英語、支那語を平等に取扱ひ、アメリカ講座、中国講座を附設するのがよろしかるべしと思はれ候、

○同封別紙〔書簡A別紙Bと同一のため、掲載略〕御披見被下度、

○大学設立が不可能ならば、「東亜学院」^{〔上、原文〕}専門学校でも特殊学校でも可、

○教員の轉職^{〔改〕}・^{〔旋〕}は文部省にても考慮して貰へるらしく改めて御交授^{〔被〕}被下度

○太田氏は早稲田大学政経学部の支那講座担当の意味に於て講師として推薦致置候

書簡C 齋伯守より本間喜一(留守宅)宛て

一九四六年二月五日付

〔封筒裏〕

渋谷区代々木本町七八六

本間喜一先生

〔封筒裏〕

東京都神田区西神田二ノ七

日華学会内

東亞同文會業務部

電話〔略〕

振替口座〔略〕

〔本文〕

本間先生台鑒 二月五日 齋伯守拜啓

○一月三十一日、理事会並ニ評議員会開催サレ、(一)解散(一)

清算人―学長、牧田理事、林毅睦(陸)、大西齊ノ四氏
ニ指名、(一)宮理事長ハ影ノ人ナルモ四氏ト同格ニ列
席スル指名ヲ受ク)―サル(三)國際的性情ノ文化團體ヲ新

設シテ後継団体トス(東方學術研究会ト假称ス) (四)解散
手当ニ関スル件ヲ議決サレ申候

○同文會カラハ小生共ノ希望条項(前便同封〔書簡A別紙
B〕御参照ノコト)ニ対シテ学長ノ帰還サル迄留保サ
レ度シトノ回答アリ、仍テソノ趣旨ヲ諒トシテ靜觀スル
コト、相成候

○大西氏ハ兎モ角、他ノ清算人ハ小生ノ希望通りニ相成リ
タル為メ(主トシテ津田理事ノ幹旋)一先ツ安心シテ帰
郷可仕候

○牧田理事トノ約束

1、新大学設立ノ際ハ圖書六万冊並ニ同窓ノ饋金(後
援會?)三千万円ヲ寄附スル様尽力スルコト

2、後継団体ニ注入移讓スル金円ハ出来ル丈ケ少クシ、
解散手当ニ全部ヲ使用サルベキコト、

○經理關係ニ就テハ御傳言ノ百万円ハ準備シアル筈、未着
送金ハ当地ニテ合理的ト思ヘルモノハドシ、支拂実施
中、(坂本氏、下関、福岡兩替為貯金局ニテ送金状態調
査中、同文會ヨリハ下関二十五万円納金セシ為メ専門部
關係ニ不着ノモノ多シ)

○内地會計事務ハ石川氏、広江氏ノ協力ニ一任ス、
庶務ハ浅野氏ニ教務ハ太田氏ニ一任ス、坂本氏ハ専門部
長代理トシテ学長代理事務モ兼任、

○轉学ニ関スル一切ハ太田氏詳悉、

○新設学校ニ関シテ

✓長峰氏、坂本氏ト相談ノ上、別府市ノ協力ヲ盡力サ
レ、上京ノ上、意嚮ヲタゞサレンニツキ、九州ハ将来、
中国軍ノ進駐区域ト思ハル為メ、且ツハ地元ノ応援ハ

他ノ何レニテモ申込ナク、又氣候温暖、物資豊富低廉ナル理由ニヨリ、両氏ニ幹旋ヲ委嘱ス

✓一宮理事長ノ郷里ニツキ、一宮氏ニ花ヲ持タセ、同氏ノ盡力ヲ待チツ、アリ、(名ヲ與ヘテ実ヲ取ル)

✓外務省・文部省ノ意向ニヨリ國際的の性格ノ大学ヲ企劃ス、太田氏ノ原案ヲ採用

✓大学設立假事務所ヲ別府^{別府}ニ設ケ寄附金募集ノ連絡場所トサレ度ク

✓但シ學生ニ動揺ヲ與ヘルヲオソレ、太田、三好^{三好}(四郎)、長峰、大本(大木隆造)、坂本ノ諸氏ニノミ打開ケンモ他ハ秘密トス(妙ナ分子ヲ加ヘナケレバナラヌ点ヲモ考慮セリ)

✓官廳側ノ要求トシテ書院ノ痕跡ヲ残サヌ様ニトノコトニツキ特ニ御留意相成度ク

附記

○残務整理特ニ轉学処置ハ一ヶ年ヲ要スル見込ニツキ經費三十万円位が準備サレル筈、

○学校側カラモ残務整理委員ヲ加入サレ度キ牧田理事ニ申込アリ

○全教職員ヲ集合サレル必要アリト思召サバ御招電ヲ發セラレ度ク或ハ一部分ノミニテモ可、

○小生身体思ハシカラス本夜出發可仕、養生ノ上再度上京御報告申上度御招電被下度願上候

*これらの書簡は以前、愛知大学旧公館に保管されていた本間喜一関連資料を同大学五十年史編纂事務局(現大学史事務室)にて仮整理したものの中から、現在愛知大学六十周年記念事業の關係で定期的に來学されている加藤勝美氏(フリーライター)が選定されたものが中心となっている。加藤氏には衷心より感謝申し上げる。また、仮整理時にとりわけ目録作成に精力的に携わってくれた荒木亮子氏(現姓森田。当時臨時職員)には、改めて芳いの意を表したい。

参考・関連文献

- ・「愛知大学二十十年の歩み」愛知大学二十十年史編纂委員会、一九七二年
- ・「東亜同文書院大学史」大学史編纂委員会(財団法人発行)、一九八二年
- ・「東亜同文書院大学と愛知大学」全4集 愛知大学東亜同文書院大学記念センター(六甲出版刊)、一九九三、一九九六年
- ・「愛知大学五十年史通史編」愛知大学五十年史編纂委員会、二〇〇〇年
- ・「愛知大学小史六十年の歩み」愛知大学小史編集会議(粹出版社刊)、二〇〇六年

(愛知大学大学史事務室)

